

和秦太虚梅花

秦太虚が梅花に和す

元豊七年（一〇八四年正月） 49 歳

西湖處士骨應槁

西湖 処士骨 応に槁かるべし

只有此詩君壓倒

只此の詩有りて 君 压倒す

東坡先生心已灰

東坡先生 心 已に灰かいす

爲愛君詩被花惱

君が詩を愛するが為に花に惱なやま被まる

多情立馬待黃昏

多情 馬を立てて 黄昏を待つ

殘雪消遲月出早

殘雪 消ゆること遅く 月出づること早し

江頭千樹春欲闌

江頭 千樹 春闌くれんと欲す

竹外一枝斜更好

竹外 一枝 斜なるは更に好し

孤山山下醉眠處

孤山 山下 醉ひて眠ると處

點綴裙腰紛不掃

裙腰くんようを点綴てんていし 紛ふんとして掃はらはず

萬里春隨逐客來

万里 春は逐客ちくかくに随したがひて来り

十年花送佳人老

十年 花を送って佳人老ゆ

去年花開我已病

去年 花開きて 我已に病めり

今年對花還草草

今年 花に對し 還またた草々

不知風雨捲春歸

知らず風雨の春を捲いて歸るを

收拾餘香還畀昊

余香を收拾して還ごうた昊あたに畀へん

【語釈】○秦太虚…秦觀の字、江蘇高郵の人。熙寧十年（一〇七七）徐州の太守であった蘇軾に始めて謁し、のち軾の推薦で大学博士となり、国史院編修官を兼ねた。詩詞に巧みで、蘇門四学士の一人。○梅花…秦觀の※「黄法曹の建溪の梅花を憶ふに和す」の詩（淮海集卷四）をいう。○西湖処士…宋の林逋をいう。梅を詠じた山園小梅の詩の「疏影暗香」の聯が名高い。処士は無官の人。○骨応槁…槁は枯れる。死んで年久しいこと。○心已灰…人間的な感情がかわき切ること。○被花惱…花が自分を悩ますということ。○心已灰…人間的な感情がかわき切ること。○待黄昏…林逋の名句「暗香浮动月黄昏」の黄昏にちなむ。○「竹外一枝斜更好」…梅を詠じた名句。○点綴…かざりをつける。月の光をうけて、梅の花の影がぼつぼつうつるのをいうか。○裾腰…婦人の腰から下につけるきもの。孤山寺の路は草の緑に萌え出たとき遠くからみると裾腰のようにみえたという。白居易の杭州春望の詩に「誰か開く湖寺西南の路、草緑にして裾腰一道斜なり」。○花送…孟郊の楽府、雑怨に「花送人老尽」○草草…心労するさま。詩経の小雅の巷伯に「労れたる人は艸艸たり」。○捲春帰…欧陽修の詩に「落絮風卷き尽し、春帰つて迹を留めず」（鎮陽潭園に留題す）○昇昊…昊は昊天、天のこと。界は音ヒ、附与する。詩経の小雅の巷伯に「有昊に投界せん」。

【通釈】西湖の孤山に隠棲した処士、林逋が逝いて年久しく、その骨も既に枯れたことだろう。だがいま秦君は、この詩を作つて暗香疎影で名高い林逋を圧倒させた。わが輩、東坡先生も感情はすっかり灰になり、乾ききってしまったつもりでいたのが、君の詩を好きになつたばかりに、この花の悩ましさに耐えかねている。

この多情の花のまえに馬をとどめて黄昏を待てば、まだ消えやらぬ残んの雪に月の出は早く、江辺の樹々に春の夕闇のおとずれる頃、竹むらの彼方に斜めにさし出た一枝の趣きは、またことさらである。

孤山のふもとに酔いしれて眠る時、もすそには払いもあえぬ花模様が乱れつく。放逐されて万里の彼方にさすらう人をも追つて春は訪れて来るが、十年という歳月、毎年花を見送っているうちには、うら若き乙女とて老い衰えてゆく。

去年は花の開く前から、わたくしは病床にあつたし、今年花にむかいながらも、やはり心も身にそぐわぬ思ひでいる。うっかりしているうちに、風雨に巻き上げられて春は天上へ帰つてゆく。のこんの梅が香を集めて天におわたしすることにしよう。

蘇東坡 近藤光男より抄出

※【参考】和黄法曹憶建溪梅花（一〇八三年三月） 北宋・秦觀

海陵參軍不枯槁、醉憶梅花愁絕倒。爲憐一樹傍寒溪、花水多情自相惱。
清淚班班知有恨、恨春相逢苦不早。甘心結子待君來、洗雨梳風爲誰好。
誰云廣平心似鐵、不惜珠璣與揮掃。月沒參橫畫角哀、暗香銷盡令人老。
天分四時不相貸、孤芳轉盼同衰草。要須健步遠移歸、亂插繁華向晴昊。